

中国研修プログラム実施報告

国際交流委員長 巴特尔

2019年9月1日～9月8日に実施した中国研修プログラムの概要を下記の通りご報告します。

1. 実施期間:2019年9月1日(日)～9月8日(日)

※台風による欠航のため9月9日(月)帰国

2. 実施地:中国(天津市・内モンゴル自治区・北京市)

3. 参加者:バートル教授、水盛涼一准教授、多摩大学学部学生15名の計17名。

4. プログラムの実施背景・目的:

本学は、2003年に中国の天津財経大学と、2017年に内モンゴル師範大学と、それぞれ包括的な交流協定を締結し、交換留学生の派遣・受入れを中心とした交流を推進してきた。今後は本学が一方的に受入れるだけでなく双方向の交流を図ることが重要との認識から今回は本学の学生を教員が引率して両大学を訪問し学生同士の直接的な交流を図ることで本学の学生の両大学への交換留学を促すためのあり方を探るべく本プログラムを実施した。同時に、本学の「グローバルビジネス入門」や「中国経済論」「アジア経済論」といったグローバル系の科目と連動しながら中国を総合的複眼的に理解することに加え、学生目線から日中関係の今後を考えるきっかけづくりも目的として以下のような交流活動を実施した。

5. 活動内容

中国研修プログラム行程表(9/1～9/8、北京・天津・内モンゴル)			
月日	午前	午後	夕方
9月1日(日)	・7:00 羽田空港国際線ターミナル時計塔(富士)前集合 ・JL21便9:05発⇒北京首都国際空港12:05着	移動: 案①北京首都空港⇒高速バスにて天津市へ(T3出口より天津行きのバスの切符を購入し、終点の天津西站客運站を降車、地下鉄1号線で「財経大站」駅で降車D出口より財経大キャンパスへ) 案②北京首都空港⇒北京南駅より新幹線にて天津市へ移動 昼食(機内食)	天津財経大学交流センター寮泊(住所:天津市河西区珠江道25号) レストラン「心園」があり。 夕食(天津市内)
9月2日(月)	・9:30教室へ移動 ・10:00-11:30 講義「日本文学史と文学選読」(4年生の授業・L307教室) ※多摩大生発表の可能性あり 朝食(8:00学食)	・13:20-14:50 講義「高級日本語」(3年生の授業・K205教室) ※多摩大生発表の可能性あり ・15:00～天津財経大学キャンパス視察 昼食(学食)	天津財経大学交流センター寮泊 夕食(学食)
9月3日(火)	・8:00 専用車にてホテル出発 ・9:00-9:45 エアバスA320組立工場見学(住所:天津空港经济开发区九道2号) ・10:30-11:30 康師傅理想園見学(住所:天津市滨海新区睦宁路218号) 朝食(未定)	・13:00-14:00 濱海文化中心・濱海図書館見学(住所:天津市滨海新区旭升路347号) ・15:00-17:00 天津古文化街視察(住所:天津市南开区通北路与东马路交叉口) ・19:30-20:30 海河遊覧船乗船体験(乗船場所:天津古文化街碼頭) 昼食(市内、11:45-12:45)	天津財経大学交流センター寮泊 夕食(17:30-18:30)
9月4日(水)	・7:30集合:専用車にて天津濱海国際空港へ ・天津空港SC4717便9:20発⇒フフホト白塔空港10:50着 朝食(未定)	フフホト市内視察(綏遠城將軍衙署博物院・歴史博物館、慈燈寺、旧市街回民区など) 昼食(市内)	博曼海航大酒店泊(住所:呼和浩特市賽罕区鄂尔多斯大街中段师范大学西南区) 夕食(市内)
9月5日(木)	・7:00 ホテルから内モンゴル師範大学盛楽キャンパスへ移動(住所:呼和浩特市和林格爾盛楽經濟園区209国道側) ・8:20-10:00 内モンゴル師範大学学生との交流 ・10:20-12:00 内モンゴル師範大学学生との交流 朝食(ホテル)	・14:00-15:30 内モンゴル師範大学校史館・少数民族文学館見学 ・15:30 専用車にて内モンゴル師範大学本部へ移動(呼和浩特市賽罕区昭烏達路81号) 昼食(11:30大学食堂)	博曼海航大酒店泊 夕食(市内レストラン)
9月6日(金)	7:00 草原文化の体験(シャルムレン草原One Day) 朝食(ホテル)	16:00 乳業大手の伊利グループ見学(住所:呼和浩特市金山开发区金四道8号伊利乳都科技示范園) 昼食(キャンプ地)	博曼海航大酒店泊 夕食
9月7日(土)	・6:30専用車にて白塔空港へ向かう ・フフホト白塔空港CA112便8:25発⇒北京首都国際空港9:45着 朝食(ホテル)	北京市内視察(天安門広場・故宮博物院・国家博物館、天壇など) 昼食(北京市内)	北京東方花園飯店(Oriental Garden Hotel)泊(住所:中国北京东城区东直门南大街6号) 夕食(北京市内)
9月8日(日)	移動:12:00ホテルより北京首都国際空港へ向かう 朝食(ホテル)	移動:北京首都国際空港JL22便16:20発⇒羽田国際空港20:55着 羽田空港到着後現地解散 機内食	

中国では、主に以下の活動を実施した。

- (1) 本学の協定校である天津财经大学と内モンゴル師範大学との交流活動
- (2) 天津とフフホト両市内の企業見学
- (3) 遊牧民草原生活の体験
- (4) 歴史・文化施設の見学

6. 活動結果

(1) 訪問先: 天津市 (9月1日～4日)

① 天津财经大学との交流 (学生発表討論会)

天津财经大学の学生との交流として、双方の学生が事前学修段階で準備した課題(それぞれの大学をはじめ、国の文化や歴史を紹介する発表)に基づいた合同発表討論会を実施した。日程の関係で一日のみの交流ではあったが、発表会後の自由討論では和気藹々とした雰囲気の中で活発な議論が行われ、また若者らしく短時間で溶け込んでいる様子であった。



②天津市内の企業見学

・天津エアバス組立工場:2008年にフランスのエアバスと天津港保税区、中国航空工業集团公司とのJV(共同事業)として開設された、エアバスA320の最終組立工場を見学。同工場は、仏トゥールーズ、独ハンブルクに続く3カ所目の拠点で、欧州以外では初めての施設として稼働しており、2018年9月の開設10周年までに計380機生産。月産4機だったが、2019年に5機、2020年に6機と段階的に引き上げる予定で、現状生産された機体は中国国内の航空各社に供給しているが、今後海外の企業にも提供する予定である。

・康師傅:同社は台湾の大手食品企業である頂新グループの中国における現地法人で、1992年に中国に進出し、主の即席麺・飲料・菓子の生産・販売を行っている。2018年の売上高は前年比2.4%増の9,807億円、純利益は同35.4%増の398億円と増収増益となっている。なお、日本のサンヨー食品株式会社が同社に出資しており日本企業とのビジネス関係も深い。



③歴史・文化施設の見学

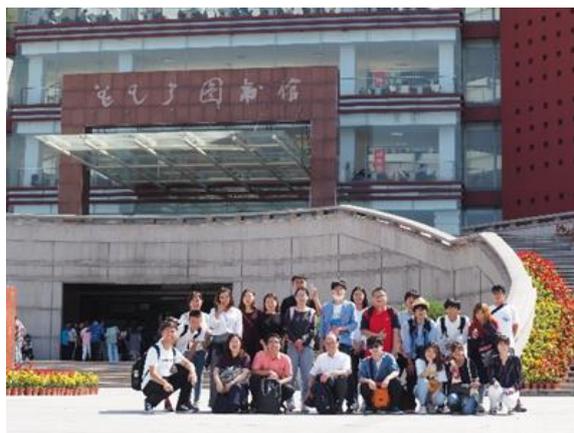
・2017年に天津市濱海経済開発区内に開館された「美しすぎる図書館」と言われている天津濱海新区図書館を見学。蔵書20万冊、近い将来120万冊まで拡大する予定。また、天津の古い町並みが見られる古文化街も散策し、同市の歴史的側面を垣間見ることができた。



(2)フフホト市(内モンゴル自治区)

①内モンゴル師範大学との交流活動(学生発表討論会)

同大学では、2年生と3年生の二つのクラスと交流を行った。天津財經大学同様、一日だけの交流ではあったが、発表会後の自由討論会の際や現地の学生との昼食会、構内諸施設の見学の機会を利用して学生同士が非常に楽しく交流することができた。



②フフホト市内の企業見学

フフホト市内にある中国の乳業最大手の伊利グループの牛乳加工工場を見学。

③歴史・文化施設の見学

フフホト市内のチベット仏教寺院の大召寺を見学。同寺院は明の万暦7年(1579年)にモンゴルトメ部落の首領アルタン・ハンによって造営されたチベット仏教ゲルー派(黄教ともいう、現在のチベット仏教の主流派)の寺院で、フフホトの最初の寺院でもある。世界のモンゴル人口のマジョリティを占める内モンゴルにおいてモンゴルの歴史や文化に触れる貴重な体験となり、中国文化の多様化を理解するうえでも有益であった。



④遊牧民草原生活の体験

フフホト市内から車で2時間あまりの距離にあるシラムレン草原において、モンゴルの遊牧民の生活(お茶・羊の料理など)を体験した。このうち、乗馬体験は学生たちに大人気だった。



(3)北京市

① 故宮博物院

故宮博物院は、明・清両王朝の宮殿建築と宮廷収蔵を基礎として設立された歴史的な文化財を保存・展示する博物館で紫禁城ともいう。2018年12月の米中首脳会談が開催された場所として記憶に新しいのだが、中国の長い歴史をじかに引率教員による解説のもとで理解を深めることができたのではないかとと思われる。



② 雍和宮

清代に建てられた北京市最大のチベット寺院。チベット仏教は清の支配民族である満洲族が伝統的に信仰していた宗教である。建築スタイルは漢、満、蒙、藏民族の特色を持つ。



8. 研修の成果と課題

(1) 事前・事後学修の教育的効果は顕著である。

研修の事前学修として、参加者を四つのチームに分け1つの班で2冊の中国関連書籍を選択し、読書感想文を1人あたりA4で3枚のレポートを作成。同時に、現地で相互発表での資料作成を行い、各班それぞれ15分の時間となるような発表資料をパワーポイントでまとめた。そして、事後学修として、今回の研修で学んだことを1人あたりA4で3枚のレポートを作成するほか、授業内で行う海外研修報告会用の資料の作成を実施した。文献とフィールドワークを通じて参加学生の異文化理解、中国の総合理解が深まったことが今回の研修の大きな成果といえる。

(2) 協定校との直接的な交流は双方向の交流に有益である。

今回は、初めての試みとして協定校 2 校を訪問したが、本学より参加した学生たちは日本の大学生としての自覚をしっかり持ち、現地での発表会はさることながらすべてのプログラムに積極的に取り組んでくれた。特に現地の同世代の大学生とは非常に自由で濃密な交流を図ることができたため、今後同種のプログラムを企画する際に学生たちの要望やアイデアを積極的に取り入れることは教育的見地から有益であると痛感した。

(3) 参加した学生の声を中心に活かすことが大事である。

① 中国に行く前は空気が日本より少し悪いのではと思っていたのだが、実際現地へ行ってみると、空気も思っていたよりは良くて、住みやすい場所だと感じた。

② 日本や日本の文化についての捉え方が自分たちとは違うという新しい発見ができた。

③ 中国の特色や文化を知ると共に日本の良さを再確認出来るようなプログラムだった。

④ 日本とは違い本場の中華料理は辛さや味が強かったのだが、慣れる度においしく感じた。また、人生初の草原での乗馬体験ができたことや現地の学生と一緒にキャンパスツアーなどが出来て、日本とは違う自然や文化を味わえてとても良かった。

⑤ 普段報道等でしか見ない所を直接見る事ができて感慨深かった。

(4) 今後の課題としては、交流プログラムに関する綿密な事前準備、共通の課題を軸とした学生同士の研究発表、現地の学生と共に行うアクティブラーニング活動、企業訪問は生産現場のみならず経営陣による講座の実施などが挙げられよう。

以上